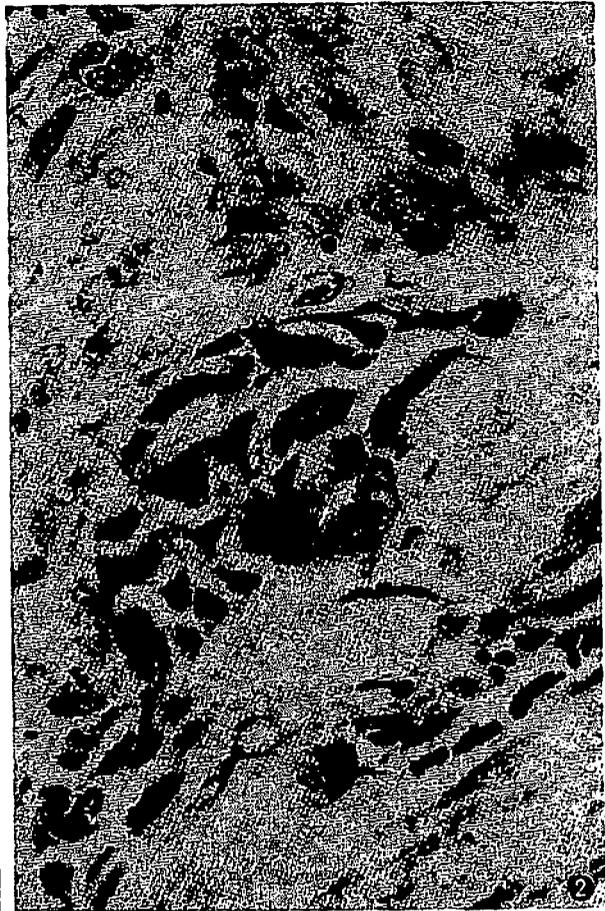


ネコの胸膜にみられた悪性中皮腫

日本獣医畜産大学家畜病理学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.273



動物：日本ネコ，雌，1才。

臨床的事項：本例は、1976年4月1日に、胸水の増量、消瘦および脱水を主徴とし、本大学家畜病院に搬入された。種々観察すると、上記の症状とともに呼吸困難も次第に著明になってきたので、同年5月1日に全身麻酔下において心臓放血死させた。生前における胸部のレントゲン像では、胸腔内全域にわたり大小様々な陰影が多数認められた。また、胸水は観察の全期間を通じ1日ないし2日おきに約100mlずつ採取したが、この性状はいずれもリバルタ反応陽性、フィブリン含量は2g/dl前後であった。この塗抹標本には、炎症細胞の他に大型で比較的豊富な細胞質を有する塩基性の単核細胞が多数認められた。

肉眼的所見：肉眼病変は、主として胸腔内に認められた。胸水は、淡赤色、半透明にして、約50ml貯溜していた。肋骨胸膜には、線維索が広範囲にわたり付着していた。肋骨、縦隔、横隔の壁側胸膜および肺胸膜には、大きさや形状は様々で、白色の若干硬固感を有する腫瘤が播種状に多数認められた。これらの腫瘤の断面は、いずれも白色で絹様の光沢を有していたが、部位によっては小出血巣も認められた。なお、胸腔内において認められたリンパ節はいずれも数倍に腫大し、肺は全域にわたり退縮していた。

組織学的所見：胸膜において播種状にみられた腫瘤は、

組織学的にはいずれも同質な性状を示していた。腫瘤がみられた胸膜は、著しく肥厚しているが、筋層との境界は明瞭である（写真1，HE，約40倍）。腫瘤の表層部における漿膜被覆細胞は、腫瘍性に著しく増殖し、部位によってはこれが腫瘤内に管状、索状あるいはびまん性に侵入している。この増殖した被覆細胞すなわち腫瘍細胞は、比較的暗調で長円形の核を有する紡錘形の細胞が大部分であるが、なかには比較的明調で類円形の核を有する立方形的のものも認められる。腫瘤の内部における組織構造は、実に多様性を示している。著しく増殖した間質結合組織細胞および線維が縦横に走行し、これらとともに前述の腫瘍細胞が管状にあるいはびまん性に増殖しており、核分裂像も散見される（写真2，HE，約480倍）。なお、腫瘤内には壊死巣や出血巣も認められ、腫瘤の深部にはリンパ球の浸潤巣が散見された。

肺においては、肺胸膜に増殖した腫瘍細胞が、貯溜した胸水のために圧迫され無気肺となった肺実質内に管状にあるいはびまん性に侵入している像が観察された。胸腔内におけるリンパ節には、いずれも洞カタルが認められた。他の臓器には、転移病巣など注目すべき病変は認められなかった。

組織学的診断：ネコの胸膜にみられた悪性中皮腫。なお、本例は胸膜原発であり、上皮性と線維性の両性格を有するものである。